

古川柳研究会会報

一四四号

平成二十年三月

川柳評万句合明和四年論講

平成二十年一月十二日

礎講 橋本秀信

明四桜6続き

7 仲人ハ七三か程しや無^イといふ

(仲人は七三が程じゃないと言う)

礎講は、仲人口の句とし、紹介する女性について「疱疹の跡はあるけれど、顔の七三とまではいかない、半分以上ですんでいる」と売り込んでいる様子とした。
席上では、「人三化七」ほどではないと言っているのではないかということに。
また席上では、「シチサン」と訓むと字余りになるの

薬取りは長く待たされるのが約束。手持ちぶさたで煙草ばかり吸っているので「尻から煙が出るぜ」などと言いながら待っている。

薬とり出来て一ふくふみつぶし 二2

10 × たかのきうおかしい雲かくされなり

(鷹のぎゅうおかしい雲がくされなり)

くされ[〓]氣持ちが重いこと。(日)
夜鷹が営業を始めたが、どうも雲行きが怪しい。雨になれば商売中止にせざるを得ないから、マネージャーたるぎゅうとしては気が重いことだ。

夜たかにも怪動の入^ルにわかあめ 宝七9 25

11 下女かかミにしめのにへる内に出来 五7

(下女が髪煮しめの煮える内に出来)

下女が、台所で煮しめを作りながら、ちよつとの隙をみて髪を結い上げる様子。

席上では、朝に「煮しめ」を作るのは日常のことではないので、花見の朝の句ではないかとの意見あり。

下女の髪二三度立てやつと結^ヒ 一一20

で、「シチザ」と訓んで、美男で有名な歌舞伎役者二世中村七三郎(元禄十六年―安永二年。明和七年少長に改名)のこととし、「七三ほどではないが美男だ」と売り込んでいるのではないかとの意見あり。

仲人はあはたの数もかそへて来 拾初36

8 才蔵ハ乳母に頼んで取^ッかへし

(才蔵は乳母に頼んで取り返し)

三河万歳の才蔵が子供に鼓を持って行かれたので、乳母に頼んで取り返す様子。お座敷でご馳走になっている場面か。

万歳ハなく子の顔をついに見ず 一三3

9 薬^リ取しりからかふか出^ルといふ

(薬取り尻から煙^{けふ}が出ると言い)

12 ○ もりか色くたりを忤文いたぶられ 末四6

(守りが色くだりを忤文いたぶられ)

色[〓]色男。情人。(江)

くだり[〓]くだり飴。地黄煎を加えて製した飴。(江)
いたぶる[〓]ねだる。せびる。(江)

子守り女の色がくだり飴を二文ねだられる。子守り女は少女なので、ねだり方もかわいいものである。下女ならこの程度のもではすまない。

もりが色たね柿の場てつい見そめ 明四松5

13 ○ 鰻汁もくわざらにやあとしうとば[〓]五7拾初28

(鰻汁も喰わざらにやあと姑婆)

「鰻汁も食べておきたいものだ」と姑婆が言っている。句のねらいがはっきりせず議論となったが、結論出ず。こなた衆ハ長生をしてくハつしやい 宮初34

14 × こせの供着かへを持て欠落し

(瞽女の供着替えを持って欠け落ち)

瞽女のお供(手引き)が、瞽女の着替えの着物を持って逃走した。瞽女の供を生業とするような底辺に生きる男の行動を詠んだ句ということか。

ござの供しつたのが来りや舌を出^シ 五6

15 ○ めき足でかへるていしゆハじやすいなり 五 7

(抜き足で帰る亭主は邪推なり)

女房が間男でもしているのではないかと邪推しながら、外出から抜き足で帰る亭主。

間男を知って旅立にへきらず 五 30

16 切^ツ通し目くされ市のあいの山

(切り通し目くされ市の相の山)

「目くされ市」は、芝神明の祭礼に立つ生姜市のこと。

「切り通し」は、ここでは芝神明の關係から見て「芝切り通し」のことだろう。「相の山」は伊勢の内宮と外宮との間にあった牛谷坂と尾部坂の間の丘陵。

句意は、芝切り通しは目くされ市(芝神明)にとつて相の山にあたる、ということだと思われるが、なぜそうなのかはつきりしない。

17 又寄て来なと出しなに一ッやき

(また寄つて来なと出しなに一つ妬き)

亭主が外出する出しなに、女房が「また寄つて来な」と軽く一つ妬いてみせる。吉原へ寄つてくるのをお見通しなのである。

お通ひハどこへとあてる袴ごし 一四四 7

な時分」だったとの意ということに。

山姥ハゑゝ年をしておつはしめ 安元智 3

21 ▲ しやくじやうハけずりすごした柄を上げる

(錫杖は削り過ぎた柄を上げる)

錫杖Ⅱ①杖の一種。上部のわくに数個の輪が掛けてあり、振ると鳴るので、道を行くとき、乞食のときなどに用い、また、読経などの調子を取るのにも用いられる。

③祭文語りが唄に合わせて振って鳴らした楽器。(目)礎講は、錫杖の柄を上げるのに、削り過ぎてまた作り直す様子かと思われるが、よく分からないとした。

席上では、「削り過ぎた」は、錫杖の頭より細い柄がすげであるのを面白く表現したものとの意見もあったが、実態分らず要研究ということに。

錫杖のやうに火のしの柄がゆるみ 一二八 36

22 見のがしにしたのなんのと手をにぎり

(見逃しにしたの何のと手を握り)

例えば、女性が密会しているのを見た男が、「黙っててやったんだから」などと恩にさせて、手を握ったりしている様子。

見たことがあるにといやなくどきよふ 安六智 6

18 そりや蜂と座頭をおどす小侍

(そりや蜂と座頭をおどす小侍)

小侍が「そりや蜂だ」と座頭をおどしている。悪戯すきの小侍が盲目をいいことにかからかっている光景。

こわいゝ座頭をしかる小さむらい 明元智 6

19 × 仲條は山のあれたてこり／＼し 拾四 8

(仲条は山の荒れたで懲り懲りし)

ここで「山」は大山であろう。墮胎医仲条が石尊詣で大山に登ったところ、山が大荒れになったので懲り懲りした。不浄な生業を神がお怒りになったのである。

きついとがとハ仲條もしつて居る 安八信 2

20 ○ 金太郎産^ッも太義な時分出来

(金太郎産も大儀な時分出来)

大儀Ⅱやつかいなこと。めんどくさいこと。(目)源頼光四天王の一人金太郎の句。礎講は『前太平記』の記述のように、雷鳴が轟くような大変な状況で生まれたことを詠んだものとした。

席上では、金太郎が源頼光に初めて会ったとき、山姥六十歳の余、金太郎二十歳くらいとされているので、山姥が懐妊したのは四十歳位という「お産をするのも大儀

23 かいぢんにからの女をしたといふ 末四 21

(凱陣に唐の女をしたと言う)

凱陣(凱旋)した兵士が「唐の女を手籠めにした」と自慢げに話している様子。秀吉の朝鮮出兵の句であろう。朝鮮をにハとこにして凱陣し 拾八 26

24 ▲ ちかぐで御座りましやうと薬^リ取

(近々で御座りましようと薬取り)

薬取りが「うちのご主人も、もう近々ご臨終でございましよう」などと話している。

薬^リ取^リ旦那をころり遣^リたがり 明三桜 6

25 心中をざつとするのハ手だてなり 拾七 2

(心中をざつとするのは手立てなり)

ここで「心中」は「心中立て」のこと。心中立ては、本来「相愛の男女が自分の真情を形にあらわし、証拠として相手に示すこと」(目)であるが、それをざつとするのは手段である、すなわち吉原遊女の手練手管であるという意。

金を取る証文にする入^レほくる 八〇 11

26 ▲ 朝とばん母の苦にする汁きらひ

(朝と晩母の苦にする汁嫌い)

礎講は、味噌汁の出る朝と晩の食事時にないだら息子のことを、母が苦にしている様子とした。

席上では、単に汁嫌いの子供のことを母が苦にしている句との意見があり、両説ありということに。

27 ▲ 神楽堂切ッ刃を廻ししまひ也

(神楽堂切ッ刃を廻し終いなり)

切刃を回すⅡ抜き身を振り回す。(目)

神楽神子が剣を持って舞うという類句多数の一。初穂百文を奮発すると剣の舞を披露して終了する。

神楽堂切ッ刃廻すは直か高し 明六亀2

28 ▲ 四五人ハかつぎちよつとゝ見たおとこ

(四五人はかつぎちよつとと見た男)

賭場へ蕎麦屋が出前に行くというパターン句の一。かつぎ(蕎麦屋の出前持ち)が賭場へ出前に行ってみると、その中の四五人は町内でちよつと見たことがある男だ。

かつぎどのおらがやろふはいなんだか 二二5

29 口ばたをたいこ遣ッ手につめられる 五7

(口端を太鼓遣り手につめられる)

太鼓持ちが遣り手の悪口などを言つて、遣り手に口端を抓られている。前句「おとけ社すれく」で、真剣に喧嘩しているわけではなく、好敵手の戯れ合いである。

たいこ持遣ッ手を真似てどふづかれ 明三912

30 ○ 小侍夜なべのそばて墨をすり

(小侍夜なべの傍で墨を磨り)

礎講は、①小侍が先輩に夜なべをお願いして勉強する光景で、自分も墨を磨つて準備している様子、②あるいは、昇進などの祝い事があつて諸方へ手紙を出すことになり、小侍も墨を磨つて手伝っている様子かとした。

席上では、夜なべの「傍で」だから、勉強のように小侍が当事者になっているのではなく、主人の夜なべ(内職)を手伝っているのではないかとの意見もあつたが、結局礎説①ということに。

そろばんの手跡しなんの夜なべなり 安四叶3

31 × 御切ッ手にかぼちやを持ってひかへて居 拾二15

(御切手にかぼちやを持って控えて居)

御切手Ⅱ切手御門の略。江戸城門の一つ。大奥に通ず

34 × かいこ時あるがいなしとしようといふ

(蚕時ある甲斐無しとしゅうと言う)

蚕時Ⅱ養蚕の時期。(目)
礎講は、養蚕の繁忙期に、姑が妊娠中で動けない嫁に對し「この忙しい時期に、いる甲斐のない役立たずだ」と悪口を言っている様子とした。

席上では、①妊娠とかいいうのではなく、何かと嫁いびりをしたい姑が、まだ不慣れな嫁の悪口を言っているのではないか、②あるいは、養蚕が主に女の仕事なので、舅が「男は役立たずだ」と言っているのではないか、などの意見が出され、両説ありということに。

うきものに姫おして置ッ蠶時 明二礼2

35 × はらがけに成と子供ハあたまがち 五7

(腹掛けになると子供は頭がち)

そのままの句。着物を脱がせて腹掛けだけになると、子供の頭でつかちの体型がよくわかる。

平服の禿すこぶる天窓勝 一五四4

36 ▲ 岡場所へ時くいやな惣じまひ

(岡場所へ時々嫌な惣仕舞)

惣仕舞Ⅱ惣揚。一廓または一樓中の芸妓または娼妓の

33 ○ 上へで喰御用もつての外首尾

(上で喰い御用以ての外不首尾)

礎講は、御用聞きがお得意先で上にあがつて食事を頂いたが、以ての外の不作法なことをしてしまった様子とした。

席上では、御用聞き風情が、上りこんで食事をしたことを主人に叱られたという句ということに。

あつい茶をのんでゝ御用しかられる 一一34

全員を揚げて遊興すること。(江)

岡場所がけいどうにあつて、営業が出来なくなったことを「嫌な惣仕舞」と表現したまでの句。

岡場所はいやな病ひか折く来 宝七 11 5

